

II-5 中間的労働を評価するための理論枠組み—ケイパビリティの観点から

村上 慎司

■ I 「活動概要と成果」

中間的労働は、労働市場への（再）参入だけでなく社会参加の側面があり、この点をどのように評価するのかが理論的課題である。本研究は、経済学者アマルティア・センによって提唱されたケイパビリティの観点から、この課題に対して、二つの研究内容を中心として取り組んだ。

第一に、労働とケイパビリティに関する先行研究を検討することである。こうした先行研究として、奥西（2008）、Leßmann and Bonvin（2011）、Suppa（2012）等があつて、これらを踏まえた浦川（2014）の議論は有益であり、重点的な検討対象と設定した。浦川（2014）の問題意識は、仕事満足度・幸福感といった主観的厚生に関する研究領域のなかで労働の価値・役割を再検討することであり、とりわけケイパビリティ・アプローチの可能性に注目する。日本の先行研究において、価値の高い仕事を行うための機会が実際にどのくらい保障されているのか有効に論じられるケイパビリティ・アプローチの分析的視点から仕事満足度の要因を検討した研究は乏しく、その一つが奥西（2008）である。だが、奥西（2008）は就労者本人の学歴や子ども時代の社会階層などの重要な変数が考慮されていないという。そこで、浦川（2014）は、これらの変数をコントロールした計量分析を行っている。具体的には、「仕事に対するケイパビリティ」の水準を測る上で、アンケート調査に基づいて就労者に尋ねた（1）「仕事における裁量性」、（2）「仕事で能力や強みを発揮する機会」、（3）「仕事の多様性」に三つの設問に関する回答結果が使用された。そして、こうした「仕事に対するケイパビリティ」と「仕事満足度」・「健康感」・「幸福感」から構成される主観的厚生との相関関係が正であることを分析した。そして、本分析は就労者本人のパーソナリティ属性・学歴・子ども時代の社会階層などの変数を制御した議論も展開し、その結果として男性については子ども時代の良質な社会環境と高学歴が「仕事に対するケイパビリティ」水準に好影響を与え、他方で非正規雇用の場合は同水準を低くなり、能力向上機会にマイナスのインパクトをもたらす可能性が男女とも示されるという。

これらの研究を検討した結果、本研究は、浦川（2014）等が労働とケイパビリティ研究への重要な貢献を行っているものの、アンケート調査に基づき主観的厚生との関連に着目しているために適応的選好形成に由来する問題に十分に対処できない可能性があり、ある種の客観的特徴を備えた社会的不利性を背景とする中間的労働を評価するためには別の理論的枠組を構築する必要があるという見解に至った。

第二に、社会参加の特徴は、ケイパビリティを構成する要素の一つであるエージェンシーの議論からアプローチできるのではないかという着想から、関連文献を考察することである。ここでいうエージェンシーとは、正確に言えば、センが提唱する「エンジェンシー的自

由 (agency freedom)」を意味する (Sen 1985)。センは、自由概念を福祉的自由とエージェンシー的自由に大別する。前者は、ある個人の福祉に直接的に関連する自由を意味する。これに対して、後者は、ある個人の追求する理由があると考えられる目標や価値に資する行為や状態が当該個人の福祉に直接結びついているかどうかに関わらずに、このことを実現するための自由に関わるものである。Alkire(2008)は、こうしたエージェンシー的自由の測定に関する研究を行っている代表的なものであり、主に心理学において議論されている代表的な概念とその測定論についてサーベイしている。具体的には、エンパワメント、自己効能感、自己決定理論、自律などの研究群を対象としている。これらにおいても、先の第一の研究内容の課題とも関わるが、自己申告に依拠した測定をいかに妥当なものにしていくのが論点となっている。こうした研究成果は、中間的労働の評価研究に対して寄与する余地はあるものの、依然として理論的ギャップも大きく、その空隙を埋めるような研究を行うことが今後の課題である。

最後に、研究会等を通じて以下の課題が浮上した。それは、「仕事に対するケイパビリティ」やエージェンシー的自由についての評価を別個に行うのではなく、労働とエージェンシーに加えて所得再分配後の所得状態を含めて総合的に当該個人のベーシック・ケイパビリティを評価するほうが理論的に妥当ではないかという見解の探求である。この課題も含めて次年度も継続して研究する計画である。

参考文献

- Alkire, Sabina (2008) "Chapter 10 Subjective Measures of Agency," Bruni, Luigino., Flavio Comim and Maurizio Pugono eds, *Capabilities and Happiness*, Oxford: Oxford University Press, pp. 254-285.
- Leßmann, O and Bonvin, J. M. (2011) Job satisfaction in the broader framework of the capability approach, *Management Revue*, Vol. 23, No. 2, pp. 98-118.
- Sen, Amartya (1985) "Well-Being, Agency and Freedom: The Dewey Lectures 1984", *The Journal of Philosophy*, Vol. 82, No. 4, pp. 169-221.
- Suppa, Nicolai (2012) "Job Characteristics and Subjective Well-Being in Australia: A Capability Approach Perspective," *Ruhr Economic Papers*, No, 388, pp. 1-27.
- 浦川邦夫 (2014) 「第5章 ケイパビリティと仕事満足度」橘木俊詔編『幸福 (福祉 + α ⑥)』ミネルヴァ書房, pp. 73-92.
- 奥西好夫(2008)「正社員および非正社員の賃金と仕事に関する意識」『日本労働経済雑誌』No. 576, pp. 54-69.